

※双方記憶あり転生。原作ネタバレ。未来捏造。

旧新宿駅跡地、喫茶店の窓際テーブル席。

ハーフアップにお団子を結った、ロン毛の塩顔イケメンがひとり、涼しい表情でモーニングティーを嗜んでいる。

あの頃背負ったスクールバッグより、小さくてオシャレなショルダーバッグを開いて、スマホを取り出す。

ウィジェットのメモには、今日の日付と、30分後の時間。画面を見ていると、ピコーン、と軽快な通知音と共に、メッセージアプリが表示された。

《冷えてきたから早く入っておいで》

顔を上げれば、あの頃より穏やかに笑う彼がこちらに手を挙げていた。

人が少ない時間と場所でよかった。

彼に頬を赤らめる他の女の子たちなんて見たら、迷わず領域展開してるところだ。

そんなことを考えていると、手元のスマホが次のメッセージを報^{しら}せる。

《どうしたの？忘れ物？調子悪い？》

心配気に今にも席を立とうとする姿に、口の動きで『大丈夫』と伝えて階段を駆け上がる。

「なかなか入ってこなかったけど、どうしたの？」

僕のバッグを受け取りながら、心配症の問いは続いた。

長年の経験上、ここは素直に言うべきだけど、決して褒められた思考ではないから正論で咎められるだろう。

最適解はこれだな。

「僕の彼氏は恰好良いなあって見惚れてた」

感情だけ正直に伝えること。

効果はあった。悪い気はしないのだろう、『なんだいそれ』と言葉では呆れながら目許と口端は緩んでいる。

「私の彼女は可愛いし美人さんだ」

そんな嬉しい軽口と頬にキスが戻ってきた。

あの決戦から150年。

某漫画のように文明が一度は崩壊し、色々問題はあるながらも復興してきたそう。そんな状況で昔より呪霊の被害が格段に小さいのだから、僕の強く聡い仲間たちが精一杯頑張った成果だ。

もはや最強は必要無い。前世と呼ばれる記憶を持って再び生を受けたと気付いた時、俺は誓った。

あの頃の僕の夢は叶えたから、今度は俺の夢を叶えろと。

「今日はこのあと、竹下通りの屋台でクレープね」

あそこら辺はどれだけ経っても何が起ころうと、食べ歩き
の道のようなのだ。

ずっと昔に、彼も仲間と食べに行くと言っていたことを
思い出す。

「ねえ悟、」

「ん？」

せっかくだから何か飲もうとメニューを開く。ホットミ
ルクかバニラココアか。

「卒業したらさ、私たち、家族にならないかい？」

続く言葉に手元の冊子を取り落とした。

まるで今日の天気でも話すみたいに。今、なんて言った
の。脳を処理落ちさせるのは僕の十八番なんですけど。

いつかの学舎の廊下のように、あるいは地下鉄の駅のよ
うに、口から音が零れる。

「…は？」

「本当はね、あの頃からずっと、言いたかったんだ」

「…置いて、いった癖に…」

「うん。君が人を殺すのは嫌だったからね。だけど、あんな
死なせ方をさせるくらいなら、もっと考えたよ」

「…僕…」

静かに伏せられた瞳に、小さく名前を呼ぶと、僕は困った
みたいな顔で笑った。

その話題はお互いにこれから歩み寄っていかなくてはならない部分だ。しかし今はそれよりも。

「…無理、してない？」

「まさか。私もね、あの頃出来なかったことを、やってみようと思ったただだよ。自分が、心の底から笑えるように」

調子の良いことを。でも、そっか。そっか。なら、安心した。

今度は僕が眼を伏せた。すぐさま目許や頬が拭われる。

「これも、あの頃は出来なかったことだね」

溜め息混じりに「君が泣けて良かったけど、君の涙を見てると胸が苦しいよ、なんて勝手なことを言ってくれる。涙なんかお前を殺した瞬間さえ流れなかったよ。」

羨ましかった、本当は。

あの頃、僕に家族と呼んでもらえる、彼女たちが。

俺で本当にいいのかな。お前、ちゃんと笑えるかな。

俺、こんなだから、またお前のこと、判^{わか}ってやれないかも知れないよ。

それでも、いいのかな。

大きな掌に優しく両頬を包まれて、額を寄せ合う。暖かい。

息を吹き込むように、祈るように紡がれる言葉は、間違いなく呪いだ。

したいことも、欲しいものも、叶えたいことも、結局全部、ふたりなんだ。

「好きだよ、大好き。もう二度と誰にも任せない。死んでも絶対離さない。悟、私のお嫁さんになってくれませんか？」

嬉しい、嬉しい、夢みたいだ。

「ー喜んで」

まったく、世界のバランスを変えたとまで言われたかつての最強も、随分しおらしい女の子になってしまったようだ。

鏡を見なくても自分がどんなにだらしのない表情をしているか^{わか}判る。でもそれは相手もきっと同じだから。それなら、いいや。

愛おしげに撫でられて、誰の目にも留まらない片隅で、何度目かのキスをして笑い合った。

10月前半の、少し肌寒いある日のこと。